

福井晴敏

Aimless AEGIS by Fukui Harutoshi

亡国の
アイリス
ジグス

亡国の イージス

aimless AEGIS by Fukui Harutoshi

福井晴敏

ほうこく
亡国のイージス

定価はカバーに表示してあります。

第一刷発行 一九九九年八月二十五日

著者 福井晴敏 ふくい はるとし

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社



〒112-8001 東京都文京区音羽二―一二―二一
編集部 〇三―五三九五―三三〇五
電話 販売部 〇三―五三九五―三六二二
製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。

福井晴敏（ふくい・はるとし）

一九六八年東京都墨田区生まれ。私立千葉商科大学中退。九七年、警備会社勤務する傍ら初めて応募した作品『川の深さは』が、第四十三回江戸川乱歩賞選考会で大きな話題となる。翌九八年『Twelve Y.O.』で第四十四回江戸川乱歩賞を受賞。本作が受賞第一作。

目次

終章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	序章
629	417	328	211	132	53	5

写真
装帧

竹内敏信
多田和博

亡国のイージス

序 章

一・行

如月行は、千葉県の南端、館山^{たてやま}にほど近い山間の小さな町で生まれた。ロッキードに続いて浮上したダグラス・グラマン疑惑が永田町の金権体質を浮き彫りにする一方で、スペース・インベーダーがテレビゲーム時代の到来を宣言。ゴダイゴが「銀河鉄道999」のテーマソングを大ヒットさせている頃だった。

半径五キロ以内に電車は走っておらず、夏の観光シーズンを除けば訪れる人も車もほとんどない。山を下った先にある漁村は寂れつつあり、それは周囲でわずかばかりの土地を耕している農家にしても同じだった。太平洋に熟れた葡萄^{ぶどう}の房のような形を突き出している房総半島の突端は、都会から海水浴にやってくる車と、ブラウン

管に投影される映像だけが時代の変化を伝える忘れられた僻地^{へきち}で、物心がついてからしばらくの間、行は他の世界をまったく知らずにそこで育った。

最初の十年間、行は田上^{たがみ}という母親から受け継いだ姓を名乗っていた。父親はいなかった。近在の地主が採算の取れなくなった畑を潰^{つぶ}して建てたアパートの一室で、ひっそりと生活する母子を訪ねる者もなかった。それを不思議に思ったり、不満に感じたりすることがなかったのは、他の家庭の様子を知る機会が皆無だった——閉ざされた過疎地の住人たちは、自分の子供が父親の知れない、夜の商売をしている母親の子供と遊ぶのを歓迎しなかった——からだし、母が自分を育てるためにどれだけ苦労しているか、知っていたからでもあった。

山ひとつ越えた先にある町の店に通うのに、母は自転車を使っていた。一時間に一本だけ走る路線バスがあっ

たが、九時過ぎにはそれもなくなくなってしまったので、帰りのタクシー代を節約するためにはそうするしかないのだった。毎夕六時ごろ出かけていって、明け方の四時近くに疲れきった様子で帰ってくる。ペダルを漕ぎ続けてばんばんになった足に湿布を貼り、倒れ込むように隣の布団に横になると、すぐに寝息をたて始める。夢うつつの中、微かに漂ってくるアルコールと香水、湿布の匂いを嗅ぐのが、行は好きだった。さまざまなのが渾然一体となった母の匂い——それは独りぼっちの夜に終わりを告げ、行の住む世界の輪郭を形成して、外部の嫌なものや怖いものから守ってくれる温もりの源だったからだ。それさえあれば、行にはなにも必要なかった。貧困にも、孤独にも、同じ学校に通う子供たちの辛辣な悪口にも、耐えることができた。

実際、行には母親との生活だけがすべてだったので、周囲が自分をどう見ているかなどまったく気にならなかった。子供たちが親の陰口を引き写してなにを言っても、取り合おうとはしなかった。顔を上げ、じつと相手の目を見つめて、向こうが気まづくなって捨てゼリフとともに退散するまで、黙ってそうしていた。

一度だけひどく怒り、教師が慌てて止めに入るまでめちゃくちゃに相手を殴りつけてしまったのは、ちよつと

目を離れた隙に体操着を破かれてしまった時だ。ひとりで山の中を遊び回っているうちに鍛えられたのか、人いちばいの駿足を見込まれて陸上競技の地区代表候補に選ばれた直後のことだったが、つまらない妬みから体操着を破いた相手は鼻の骨を折ろうが、そのために地区代表の件がお流れになってしまおうが、行にはどうでもいい話だった。問題は、母に余計な心配をかけ、新しい体操着を買うために経済的な負担までかけてしまったということ。行にはそれが悔しく、どうしようもなく情けなかったのだ。

母さんはもう十分に変なことから、自分のことでこれ以上苦労や心配はさせない。そのためにはなんにだって耐えてみせる。それが行の決めた「掟」だった。そうして自分で設定した掟に従い、人生を「生きる」のではなく「耐える」。誰から教わったわけでもないのに、それは物心がついた時には既に備わっていた行の倫理であり、また処世術だった。

いつもぎりぎりの生活を強いられていた母だったが、遠足にはちゃんと弁当も作ってくれたし、休みの日には近くの海岸まで遊びに連れていってくれた。昼過ぎまで寝ている母が出かけられるのは夕刻が近づいてからで、どっさり買い込んだ花火を自転車荷台に積むと、行を

後ろに乗せて一息に坂道を滑り下りてゆく。その時は日ごろ刻まれた疲労の色も失せ、母はからからとよく笑い、行も心の底から笑うことができた。

ちゃんと遊びに連れて行ってあげられなくて、ごめんね。でも母さん、花火大好きなんだ。そう言って、母は冬でもこもこに着ぶくれさせた行を自転車に乗せて、日の暮れた海岸に向かった。無論、行にはなんの文句もなかった。潮と火薬の入り混じった匂いは、やはり自分の住む世界を形成する大事な要素だったし、線香花火の火種を見つめる母の穏やかな横顔は、他の場所では決して見ることでできない貴重なものだった。

海を見るのが好きだったせいもあるのだろう。遊ぶ材料に事欠かないのは山の方だったが、嫌なことや辛いことがあった時、見たくなるのは決まって海の方だった。

うるさいほど賑やかに生命を实らせた山と違って、海には物静かな、茫漠とした海面の下に秘めた底深い生命のたざりがある。本当の気持ち隠したまま、平穏を維持していなければならなかった行にとって、その姿はどうか自分に重なうて見えていたのかもしれない。

なにを取り繕う必要もなく、あるがままの自分を無条件で受け入れてくれる海。水平線にはタンカーや貨物船が行き交うのが見え、それより手前を、たまたに訓練航

海中の護衛艦が横切ることもあった。細長い船体にごつごつした艦橋と煙突を載せ、レーダーをたわなに実らせただ高いマストが、夕日を背に幾何学的な陰影を浮かび上がらせる。目を凝らせば艦橋構造の上に立つ、針の先ほどの大きさの人の形を窺うこともでき、母と二人で大声で呼びかけ、気づくはずがないとわかりながら、暗灰色の船体が見えなくなるまで手を振り続けた。閉塞した過疎の土地で、それは行と母が遠慮なく声をかけられる唯一の他人だった。気づかれない代わりに、無視されることも疎まれることもない。腹に溜め込んだ不安や不満を吐き散らすように大声でわめき、少しだけすっきりした気分になって、母と顔を見合わせて笑った。

そうして休日の夕暮れ時を過ごし終えたと、自転車を押して帰る道すがら、夏にはアイスクャンデーを、冬には中華饅頭を頬張りつつ、その週に起こったいろいろな出来事や、仕事の都合上一緒には観られないテレビ番組のあらすじを、母に話して聞かせる。そうした瞬間が、行に次の一週間を「耐える」力を与えてくれるのだった。

そんなある日、母が死んだ。自殺だった。アパートの裏の山林で、枝から首を吊ってぶら下がっていた母を発見したのは近所の住民で、行は最後まで死に顔を見せて

はもらえなかった。

葬儀の手配のために派遣されてきた市の福祉員は、見せられる状態じゃないと言っていたが、行には納得できなかった。自分以外のいたい誰に、母を見る権利があるのかと思った。だが柩は閉ざされたまま火葬場に運び込まれ、母の体は小さな骨壺に収まって、幸福とは言い難かった人生の領収書のように、行に手渡された。

兆候はあった。海岸に向かう坂道を滑り下りる時、抱きついた母の背中が次第に骨ばってゆくのは以前から感じていたし、どんなに疲れていてもなかなか寝つかれず、青白い顔に焦点の定まらない目で窓の外を見ている時間が長くなった母からは、香水や湿布の匂いに混じって、なにかの腐敗臭のようなものが漂うようになっていた。おまえの母ちゃん、シャブ中なんだろ。親たちの噂話を立ち聞きして、そんなことを言う者もいたが、それがなにを意味する言葉なのかはわからなかった。ただ母と二人の世界に立ち込め、内から破壊してゆく腐敗臭に脅えていた行が、その終焉をどこかで予期していたことは間違いないかった。

許せないのは、母がなにも言わずに自ら命を絶ったという事実だった。苦勞をかけないように、心配させないように、それだけを考えて頑張ってきたのに、母さんは

自分を置き去りにして行ってしまった。どうして一緒に連れて行ってくれなかったのか。どうしてなにも言わずに行ってしまったのか。自分のことなんかなんとも思っていないかったのか――。

裏切られた。泣くこともできず、独り無縁な世界に取り残された身をぼんやりと傍観していた頭に、そんな言葉が浮かび上がった。母は自分を裏切った。自分を捨てて、ひとりだけ楽な世界に逃げて行ってしまったのだ。なら、後を追うような真似はしない。自分は耐えて、耐え抜いてみせる。逃げずに最後まで戦ってやる。そうわかり、決めた瞬間から、胸の奥でじんじんと鳴っていた痛みが消えた。行は母を憎み、世界を嫌った。すると怖いものも悲しいものもなくなり、独りばっちでいるのが全然苦痛でなくなると知った。しばらくして、行は突然名乗り出た父親のもとに引き取られていったが、もう誰かを必要と感じたり、好きになったりすることはなくなっていた。

どだい、その価値のない父親だった。貧相な体に不相応な高級ジャケットを羽織り、ネズミを連想させる顔に猜疑の目を光らせた父は、この付近一帯の土地を所有している大地主のひとり息子で、行がその放埒の結果生まれた子であることを、近所の住民たちは薄々感づいてい

たらしい。

「おれは、父親なんてやれる柄じゃないから。なにも期待すんな」

家の援助で始めたいいくつかの事業をことごとく失敗させた末、今は地代を食い潰して四六時中酒と女に溺れている男。気が弱く、自堕落で、短い正気の時間は馬券選別に費やすしか能のない父が、それは唯一正直に行に語りかけた言葉だった。墮胎の要請を無視して母が行を生んでからは、認知も援助もせずに放っていた父が、施設に預けられる寸前の行を引き取る羽目になったのは、世捨て人同然の暮らしをしている頑固者の祖父の鶴のひと声があったからだということも、それからおいおい知っていた。

「おれの子かどうか、わかったもんじゃねえって言ったんだけどよ。世間体がどうかぬかしやがって。跡取りの心配なんかしねえでも、こんなチンケな土地、おれが一代で飲み尽くしてやんのによ」

所有している二つの山の狭間に広がる敷地には、母屋と離れ、それにいくつかのプレハブ倉庫があり、祖父が住んでいる離れに近づくことは禁じられていた。母屋の一室を居室にあてがわれた行は、毎晩父がベントでさらってくる飲み屋の女たちとの乱痴氣騒ぎを嫌でも見聞き

することになり、そうしたセリフは宴の中頃になると必ず父の口をついて出るものだった。

騒ぎは夜中から明け方まで続き、嬌声とカラオケの音が渦巻く中、頭から布団を被ってどうにか寝つくと、いきなり枕を蹴飛ばされ、酔った父に酒の買い出しを命じられることもたびたびだった。仕方なく国道沿いにある終夜営業のコンビニエンス・ストアまで自転車走らせ、汗だくで酒瓶を買って帰って来ると、連れてこられた女たちは大概いぎたなく眠りこけてしまっている。下着姿のまま、足を広げて畳の上に雑魚寝している女たちからは、やはりアルコールと香水と体臭が入り混じった匂いが発していたが、行の鼻はそれよりずっと強い、饞えた腐敗臭を嗅ぎ取っていた。

死ぬ間際に母が漂わせていた臭い。薬物中毒の臭いなんかじゃない。これは人が人であることをやめた時の臭いだ。考えることを放棄し、困難から逃げ、場当たりの快楽にたかる蠅に成り下がった人の臭いだ。生ゴミを詰めた袋のように転がる女たちの中にはたいいてい父も混じっていたが、たまに奥の座敷で女のひとりと行為にいそしんでいる時もあり、いちど知らずに襖を開けてしまった、ひどい目にあったことがある。烈火のごとく怒った父が、近くに転がっていたワンカップの瓶を投げつけて

きて、額を三針縫う羽目になったのだ。

そうして宴が終わり、女たちが三々五々帰り始めると、父はひどく不機嫌になる。眠くてふらふらの行を小突き、酌をさせながら罵詈雑言を浴びせている間はいい方で、言葉の暴力だけで足らなくなってくると、本気で横面を張ったり、火のついたタバコを投げつけてきたりする。貧しい体格から繰り出される張り手は、身構えれば耐えられる程度のものであったが、その辺は父も心得たもので、にやにやと薄笑いを浮かべ、こちらが油断した隙を狙って、いきなり手を出してくるのだった。

世間はバブル景気に浮かっている頃だったが、せめて中学ぐらいは卒業しておかないと就職もままならないという知識はあったので、どんなに眠くても学校には通い続けた。楽な道を選んで、父と同じレベルの人間になつてたまるかという意地も働いていた。学校で変わったことといえは如月の名字で出席を取られるようになったことぐらいで、「如月行電車、ドアが閉まります」などと茶化す者もいたが、相手にしないでいるとその冗談もすぐに廃れ、行に声をかける者はいなくなつた。

友達と呼べる存在はひとりもなかったし、欲しいと思つたこともなかった。決して笑わず、誰とも話さず、成績だけはそこそこのレベルを維持して、体育の授業で

は類い希なスプリンターの資質を見せていた行に勝手に憧れる女生徒たちもいたが、送られてくるラブレターの束は読まずに捨てていた。

ひとりだけ親身になってくれる教師がいた。寝不足顔にたびたび生傷をこしらえてくる行の様子を気にした彼は、父と直談判に家にやってきたのだが、すぐに酒が運び込まれ、女たちの車が庭に集まり出すのを見て、行はほんの少しでも事態が改善されるのではないかと期待した自分を恥じた。誰も当てにはできないし、信用もできない。なにかを期待すれば、そこには必ず手ひどい裏切りと痛みが待っているものだ。案の定、教師はそれから二度と行の家庭事情を顧みることはなく、代わりに即金で新車を買った。余計な金を払わされた父は、その怒りを当然のこととして行にぶつけた。そして同etcそれ以上の体格に育ちつつあった息子を殴るのに、竹刀を使うのをためらわなかった。

このクソガキが、拾ってやった恩を仇で返すような真似しやがって。謝れ、謝れ、謝れ。絶叫とともに何度も竹刀は振り下ろされ、いちど殴られたところに竹刀が食い込むと、体が震えるほどの痛みが走ったが、行は決して声を出さなかった。これまでそうしてきたように、ひたすら耐え続けることに努めた。憎悪すら感じなかつ

た。そんなものは人が人に対して感じる感情で、こうしてなにかに取り憑かれたように竹刀を振り続ける父も、すべての感覚を遮断してそれを傍観している自分も、既に人ではない、人であることをやめたなにかの動物だ。

行にあるのは、おれは逃げない、逃げずに戦い抜いてみせるという意思だけだった。父と呼ばれているこの男は、いつもなにかから逃げている。母もそうだった。母はその最後の手段として自らを殺してしまったが、この男にはそれさえもできない。生きる苦痛を酒でごまかしているだけだ。自分を正当化するために、逃げようとしていないおれを屈伏させずにはいられないだけだ。それに耐えなければならぬというのなら、おれは耐え抜いてみせる。媚びず、ひれ伏さず、ここを出て行くだけの力を手に入れるまで、絶対に耐え抜いてみせる――。そう決めると、泡を吹きそうな顔で竹刀を振り回している父が滑稽で哀れなものに見える、行は感覚の薄れかけた唇の端に小さな笑みを浮かべた。父はますます狂ったようになり、手が持ち上がらなくなるまで行を殴った後、「おまえはおれの子なんかじゃない。あの女がどっかの化け物との間に作ったガキだ」と言い残して、その場に仰臥すると意識を失ってしまった。

中学三年になり、祖父の方針で進学が許された行は、人並みに受験勉強を始めた。あれ以来、父の暴力は多少鳴りをひそめていたが、夜ごとの乱痴気騒ぎは相変わらずだった。静かに勉強できる環境を求めて、ある晩離れにこっそり忍び込んでみた。

母と暮らしていたアパートより大きい離れは、土蔵を改築して少しばかりの居住性を持たせたといった感じで、近所のおばさんが手伝いで日参する以外は、人の出入りが禁じられている場所だった。中に住んでいるらしい祖父も、四年の間に数えるほどしか見たことがない。まだ頑健さをうかがわせる体軀に作務衣をまとい、まれに離れの裏で雑草を取ったりしているさまは、自他ともに認める世捨て人そのものの姿だったが、かくしやくとした所作の端々には、脆弱な父とは別次元の重さが内包されているようにも見えた。

気がつくのとじつとこちらを注視しており、視線を合わそうとするとブイといなくなってしまう。そんな繰り返しでこれまで話す機会はなく、裏切るか、暴力をふるう大人しか知らない行は、見つければただでは済まないという警戒だけを抱いて、そっと離れの扉を開けた。

微臭い暗闇に目が馴れてくると、天井の梁が見え、そ

の一角に設けられた四角い穴に梯子が掛けられているのが見えた。周囲には堆く積まれた板がいくつもの山を作っており、その合間に、骨董品らしい仏像や壺の数々が無造作に置かれていたが、なにより印象的なのは、壁に飾られた二枚の大きな絵だった。

質素に、端正に描かれた椅子に座る西洋の老婦人と、暗い情念のうねりを具象化させたような嵐の海。それが、明かり取りから差し込む月の光に照らされて、闇の中に浮かび上がっていた。絵といえは美術の教科書に載っている小さな写真しか見たことのない行に、その二枚の油彩画は新鮮な畏怖を感じさせた。

誰かに大声で呼び止められたような、目の前の幕がひよいと取り払われて、世界がその正体を一瞬だけ見せたような、そんな感覚。なにをしに来たのかも忘れ、二つの荘厳に吸い込まれていると、どっちの絵が好きだと尋ねる声が、不意に頭から降りかけられた。

祖父だった。梯子の途中に足をかけたまま、じっとこちらを見下ろしている目に、咎める色はなかった。ただなにかを確かめる鋭い眼が闇の中で瞬き、しばらくそれを見つめた後、絵に目を戻した行は、海の絵の方を指さした。

どうして。重ねられた問いに、ざらざらしているから

と答えると、祖父は目をぱちぱちしばたかせた。意外に愛敬のある顔だった。こっちの婆さんの絵の方がしっくりくるような気がするけど、なにかのつべりしている。

この海の絵みたいなのに、迫ってくる感じがしない——。その顔になにかしら身近な空気を感じ、珍しく自分から喋ると、祖父は愉快そうに笑った。後で知ったことだが、海の絵はクールベの波を題材にした一連の作品のひとつで、老婦人の絵はホイットスラーの母の像。絵の価値としてはホイットスラーの方が高いが、こちらは贋作なのだという。つまり行は無意識に本物と贋作の価値の違いを見分けたわけで、ひとしきり笑い、梯子を降りてきた祖父は、おまえには絵の才能があるらしいと言って行の隣に立った。

そんなふうになにに褒められた経験などない。戸惑い、なにを言っているのかわからずに並んで絵を見上げていると、祖父は、他のも見えてみるか？ と笑いかけてきた。こわ張っていた筋肉をほぐし、忘れていたなにかを思い出させる笑顔だった。行もぎこちなく口もとを弛めた。その時から祖父との交流が始まった。

かつては県議会のスポンサーとして、陰のご意見番も務めていた地元有力者。その頃の祖父にとって、ここにある美術品の数々は現金化される前の政治献金でしか

かったという。献金したい相手にこの絵をプレゼントする。あくまでも贈り物であるから規制には引っかからない。で、贈られた方は、その後すぐにやって来る美術商に絵を売ってしまふ。美術商は絵を贈った側が差し向けているわけで、あらかじめ決められた値段で絵を買い取れば、お咎めなしで献金が成立する、という筋書き。価値を完全に無視されたまま、カードのようにやりとりされる名画を見るに忍びなく、祖父はいっさいの手を引いて隠遁する際に、自腹でここにある美術品を引き取ったのだった。

本来は美術館に飾られるべきものだが、放っておけば、どこぞの企業の倉庫で不渡り手形になっていたものたちだ。死ぬまでの少しの間、世捨て人の慰みものになるのもよからう。そう言った祖父は、隠遁の理由についてはなかなか語ろうとしなかったが、ある時、病に伏せた妻のためだったことをそつと告白した。

「心の病でな……。政の世界に身を浸すうちに、その毒がすっかり頭に回ってしまった。今となつては言い訳にしかならんが、倅がダメになったのもそこに原因がある。もともと臆病な男だ、痴呆になった母親を目の当たりにして、いつかは自分も狂うという恐怖が心に根づいてしまったんだらう。だからなにをやっても成功しな

い。ぎりぎりのところで踏んばれずに、安易な道に逃げてしまふ。いろいろ意地汚いことをやってきたわしの因果が、子に報いたのかもしれないが……」

そう語った祖父は、その時初めてすまんと行に頭を下げた。おまえがどんな思いでこの数年を過ごしてきたかはわかつてゐる。だがわしも臆病者だった。この穴蔵から出て、また世の汚濁にまみれるのが怖かった、と。

「だがおまえには強さがある。わしら父子にはない強さ、つまらん因果を断ち切つて前に進めるだけの強さだ。今さら言えることではないかもしれないが、行、勉強をしろ。才能を磨いて、世界に飛び出していけ。こんな辺鄙な田舎にゐることはない。おまえにはその力が、健やかな感性がある」

両肩をつかみ、まっすぐ目を見て語った祖父に、なんにも感じるものがなかったと言えば嘘になる。だが共鳴するには、行の心はあまりにも堅く閉ざされていた。自分に特別な才能や強さがあるとは信じられなかったし、祖父という他人に対する不信も捨てきれぬものではなかった。離れに通い続けたのは、母屋で父の腐臭を嗅いでいるよりは、勉強したり、絵を見たりしている方がマシだからでしかなかった。

そんな行に、祖父は新しい画材道具一式を買い与え

た。この家に引き取られてから、初めてもらったプレートだった。祖父の言う才能とやらを磨くつもりは毛頭なかったが、それからは勉強の合間になんとなく絵を描くようになった。

コンテを使ったデッサンから始め、水彩絵の具を使った静物画へ。新鮮な驚きだった。筆先を動かすと、そこには新しい世界、別の宇宙が誕生するのだ。これはおまえ、本物だぞ。描き散らかした数点の習作を見た祖父はそう言い、行自身、それまで無自覚だった衝動に火がついた感觸を味わっていた。内奥から発した熱が、凍っていた血を溶かし、全身をほんのり暖めてゆく感覚。スケッチブックに向かっていると、張り詰めていた神経が和らぎ、自分がどこまでも拡がってゆくような気がする。足しげく離れに通う姿を、疑心暗鬼の面持ちで見つめる父をよそに、走り出した衝動は暇さえあれば筆を握るようになっていった。

風景画に手を出すと、家の近所はあつという間に描き尽くしてしまい、自然と足が海岸に向いた。昔、母と何度でも通った海岸。そこだけ脆くなっている感情の蓋が弛むのを恐れて、故意に行くのを避けていた場所だった。秋も中頃の海岸に人の姿はなく、母と花火をした海岸に腰を下ろした行は、朱と紺の色がせめぎあう夕暮れの海

面を、画用紙に引き写すことに専念した。

なかなかイメージした色が出せず、パレットを相手に苦戦している時、ふとなにかが動く気配が伝わった。海に目を戻すと、岬の陰から一隻の護衛艦が姿を現し、目前を通り過ぎるところだった。

ごつごつした艦橋と煙突のシルエット、マストの複雑な形。いつか見たのとそっくり同じ光景を見た瞬間、封印していた記憶が爆発して、花火の火薬と潮の混じった匂い、香水と湿布、アルコールの入り混じった懐かしい匂いが、脳の奥から染み出してきた。気がついた時には、行は立ち上がり、いつかそうしたように大声で呼びかけて、ゆったりと行き過ぎる護衛艦に手を振っていた。

母が死んでから、初めて出した大声だった。そうすることで溢れる感情を発散せよと、一心に手を振り続けているうち、艦橋上にいる米粒大の人の形が、双眼鏡でこちらを見たような気がした。

どきりとした。まさかと思いながら目を凝らしていると、低い警笛の音が海の向こうから発した。岬にはね返り、背中にぶつかって体に染み渡っていった警笛の音を噛み締めて、行はもう一度、前より大きく手を振った。

艦橋の上で、向こうも手を振り返すのがはつきり伝わ